

者

者の古い形は、𠂔で、容器からはみ出るほど“ものが**ひどく**、たくさんある”ことを表わした字です。今は、“もの”という意味と、“ひどくたくさん”という意味と二つに分かれて使われています。つまり、単独に使われる時は“もの”で、部首として使われる時は“たくさん”という意味に使われるのです。音は部首としては、^{シャ}sha ^{ショ}sho ^{チョ}tyo ^トtoと変化して使われています。

煮は、火が燃える意味の灬と、“ひどい”という意味の者との会意形声字で、“どんとんと火を燃やす”という意味で“にる”ことを表わしたものです。「煮沸」は煮て沸かすという意味のことばです。音は^{シャ}者。

奢は、“ひどい”という意味の者と威張る意味の大との会意形声字です。大は、手足を広げて力んでいる形ですから、“威張る”という意味があります。それで、「あいつ、大きな顔をしていやがる」などというわけです。“ひどく威張る”“度を越して見えを張る”という意味の字です。音は^{シャ}者です。豪奢、^{シャシ}奢侈。

暑は、日(太陽)と、“ひどい”という意味の者との会意形声字です。

“太陽がひどく照りつける”という意味で、“あつい”ことを表わしたものです。同じ“あつい”の中でも、湯のあついのは、火のしるしのついた「熱」です。暑い 寒い。熱い 冷たい。音は^{ショ}者です。酷暑、^{コクショ}残暑、^{ザンショ}避暑。

諸は、“ひどく言葉が多い”という意味の字ですが、今では単に“多い”という意味に使われて“もろもろ”などと読まれています。「諸国」は“もろもろの国”“多くの国”ということです。諸君、諸侯、諸将。音は^{ショ}者です。

著は、“ひどく草がしげる”という意味の字ですが、これも今は草に關係なく、物事の“ひどい”“いちじるしい”という意味に使われています。また“目立つ”“表面にあらわれる”ことから“あらわす”(本を書く)という意味にも使われます。顕著、著明、著名、著述。

署は、網の意味の罍と、“たくさん”の意味の者との会意形声字です。“網の目のようにこまかく手分けする”という意味の字です。“手分けする”“配置する”という意味に使います。部署、署置。また、“役所”の意味にも使います。警察署(仕事を細かく手分けして、しかも網の目をはったように緊密な連繋を取って犯人を捜査する役所)。

薯や薯は、いもがひと所にたくさん集まってできるところから、薯(諸)と艹とで表わしたものでしょう。甘薯、甘藷(甘いいもという意味の字です。さつまいもというのは、わが国における原産地が薩摩の国、今の鹿児島県だったからです)。

緒は、同音の初の意味の者^{シヨ}と糸との合字です。“糸の初”つまり、糸口^{いとぐち}”を表わした字です。音は初^{シヨ}ですが、誤って著^{チヨ}と読まれることが多いようです。端緒、緒言、緒論、由緒^{ちすじ}(血統の意味)。情緒(喜怒哀楽の糸口という意味のことば。今ではほとんどジョウチョ^トこ読まれています)。

渚は、緒^{シヨ}(初)と同じ意味の者と水との合字で、“水のいとぐち”という意味の字です。陸地から水にかわる波うちぎわ、つまり“なぎさ”のことです。水ぎわ^{みず} みぎわ。

曙は、緒^{シヨ}(初)の意味の署^{シヨ}と日との合字で“太陽の糸口”という意味の字です。“夜明け”を表わしています。太陽が地平線に姿を現わしかけた状態が曙です。この字は“あけぼの”と訓じられています。これは“ほのぼのとあけ初める”という意味のことばです。

曙光は、“あけぼのの日の光”ということですが、今までの暗黒を破

って、光明に満ちた世界になることを約束していますので、“良いことの起りかかる兆(きざし)”という意味によく使われます。

都は、“ひどくたくさん”という意味の者^トと邑^トとの会意形声字です。邑は“へん”の場合は崖^{がけ}ですが、“つくり”の場合は、邑^{まち}の意味になります。トは邑の省略変形したものです。都は、“たくさんの邑^{まち}を含んだ大きな町”という意味で“その国の主権者の住むみやこ”を表わしたものです。単に“大きな町”の意味にも使われます。音は者^トです。首都、国都、都市、都会、都邑。

箸は、者の本義に竹を加えた会意形声字で、“容器に盛られた物をつまむ竹ばし”という意味の字です。昔の箸は、一本の竹を湾曲させて、“つ”のようにし、今のピンセットのようにして物をつまみました。その様手が、鳥のえさをついばむ“口ばし”に似ているので“はし”と呼んだものです。昔は、口ばしのことも、単に、“はし”と呼んでいました。